

NEW



Holbein

ホルベイン工業株式会社
東京都豊島区東池袋2-18-4
TEL.03(3983)9251
大阪府東大阪市上小阪1-3-20
TEL.06(6723)1554
www.holbein-works.co.jp

ホルベインの「デュオ」、それは油絵具でありながら水に溶ける。つまりペトロールやターベンタインなどの溶き油ではなく水で希釈できるのだ。乾燥後は本来の油絵具で描いたような画肌に仕上がる。本格志向の画家たちが、アクリラやテンペラなどと併用して、絵画の技法を大きく拡げるのを可能にしたわけだ。また、溶剤に対するアレルギー問題も一掃した。換気に気を使うことなく創作に打ち込める、より安全な油絵具として人気を博してきた。そしてなによりも、今回のリニューアルで、新たに顔料から見直した、全100色。プロユースと呼びたい「デュオ」、それは水を得た油絵具、とでもいえるのではないだろうか。

水で描ける——次世代油絵具
アクアオイルカラー「デュオ」



水と油は反発しあう、という誤解。

田窪恭治

神域に暮らす「絶対現場」感覚のひと

林 洋子=文

Text by Yoko Hayashi

1975年、真木画廊とスナック消しゴムで同時に行ったイベント「バーボンが一本空くまではなし」。真木画廊では田窪が、スナック消しゴムでは美術家の高見澤文雄がパフォーマンス。高見澤は見事に一本空けるものの、田窪は途中で昏倒 ⑥ Anzai, 1975



I 1975

「初めての海外は、
第9回パリ・ビエンナーレへの
参加でした。1か月パリにいたことで、
のちにフランスで仕事をすることに
繋がったのかもしれません」

フランスで礼拝堂を再生したことで知られる田窪恭治が、全国の信仰を集める神社へ移住したと聞くと、いかにも大転身を想わせる。そこには、運命的な縁があった。礼拝堂の仕事が終わりに近づいた1999年、田窪の東京での講演に、思いがけない人物が訪ねてきたのだ。

金刀比羅宮の琴稜谷世宮司はそのとき、33年ぶりに巡ってくる「遷座祭」(2004年)に向けて、「三ユーこんびらさん構想」を練っていた。高校時代の親友のフランスでの仕事を耳にし、その講演を聴きに上京したのだ。30数年ぶりに再会した田窪を琴稜は同宮の文化顧問にとプロボーディした。

その年の秋にフランスから引き揚げ、翌年5月家族とともに琴平に居を移した田窪にとって、それは「原点回帰」だった。香川県内の高校で美術部に入っていた彼は、あるとき級友の「琴稜君」に誘われて金刀比羅宮を訪れた。現

1987

「『絶対現場』をやっているときに、
知人からノルマンディーにある運命的な
『場』を紹介されました」



絶対現場—1987
鈴木了二(建築)・田窪恭治(美術)と安齊重男の写
真作業
渋谷区神宮前2丁目で解体を待っていた2つの戸建
住宅に「介入」するプロジェクト。建築家の鈴木と田
窪が屋根、壁、床など外装・内装材をすべて剥ぎ取っ
て、小屋組み、柱組み、床組を残し、床のあったところ
には強化ガラス板を敷いた。その作業を刻々、安齊
のカメラが押さえた。© Anzai, 1987



在「奥書院」と呼ばれる建
物は、もともと歴代宮司の
私邸だった。明治期には高
橋由一も滞在制作するな
ど、歴史上、数多くの絵師
や画家、文化人が琴平に滯
在し、金刀比羅宮に作品を
奉納してきた。そのひとり、
伊藤若冲が描いた障壁画
『花丸図』(1764)に、
田窪は出合った。2004
年に奥書院が一般公開さ
れ、長蛇の列をつくること
になる40年近く前。地方の町では、
「油絵」というとカレンダーで接す
るのが関の山」だった。ただ香川
にいると、「対岸の倉敷に渡れば
大原美術館がある。印象派も実際
に見ることができました」。

そのような環境で「絵を描く」
ことを志した田窪が、多摩美術大
学に入学したのは1968年。「当
時の多摩美は東野(芳明・故人)、
中原(佑介)、針生(一郎)と批評家
たちが教授陣に揃っていました」。



足を踏み入れた瞬間「いける」と感じた
小さな礼拝堂サン・ヴィゴール・ド・
ミューの壁に林檎の木を描き上げたの
は、10年後だった 撮影=河村圭一

作家では前藤義重らが教え、活気
ある場だったが、学園紛争の高ま
りで翌年早々、大学封鎖に遭う。
4年生で授業が再開されると、田
窪は東野のゼミに入った。「授業
の後で、東野さんについて飲み屋
にいくと、上の世代の作家たちと
次々に知り合つたんです」。
しかし田窪は「もの派」にも「美
共闘」にも属さず、独り貸画廊で
発表し始めた。東野の影響でマ
ルセル・デュシャンの「つくらな
こと」に影響され、70年代に入
ると次第に絵画から離れ、パ
フォーマンス的なスタイルにな
る。1975年秋には「第9回パ
リ・ビエンナーレ」に、84年には



2009 「琴平山再生計画は展覧会を企画したり、プロデューサー的な業務も実際多いけれど、理想的な絵を描くための仕事なのかもね」



田達が現在制作に取り組むのは、金刀比羅宮「白書院」の複数。琴平山に群生する椿をテーマに7つの場面を写真に撮ってモンタージュ。発色のいいオイルパステルは、椿の葉のぬるっとした質感表現に適しているという
このページPhoto Kenji Morita

伊藤公象、堀浩哉とともにヴァネッサ・エインナーレ（コミッショナーは谷新）に選出されたほか、フジテレビ・ギャラリーで個展を重ねた。「既存のもの、歴史を生きかす」ことに興味の対象が移り、廢材や石といった「自然の風化物」を拾ってきて金箔を張ったオブジェは、扉や窓を想わせる正面性の強い、今思えば絵画的な作品だった。転機となつたのは87年、『絶対現場』。建築家の鈴木了二と写真家の安齊重男とともにに行つた期間限定プロジェクトで、解体を待つ2つの建物に介入する試みだった。「美術館、画廊、アートマーケットから抜け出したと

ツイア・ビエンナーレ（コミッショナーは谷新）に選出されたほか、フジテレビ・ギャラリーで個展を重ねた。「既存のもの、歴史を生きかす」ことに興味の対象が移り、廢材や石といった「自然の風化物」を拾ってきて金箔を張ったオブジェは、扉や窓を想わせる正面性の強い、今思えば絵画的な作品だった。転機となつたのは87年、『絶対現場』。建築家の鈴木了二と写真家の安齊重男とともにに行つた期間限定プロジェクトで、解体を待つ2つの建物に介入する試みだった。「美術館、画廊、アートマーケットから抜け出したと

1987年、かねてパリ在住の友人が紹介してくれていた小さな礼拝堂を、田達は訪ねた。16世紀に創建され、そのときは廃屋となっていた。「初めて入った瞬間、『いけるな』という感じを持ちました」。彼は家族とともにノルマンディー地方ファーレーズ市に移住し、村の人たちと折衝し、日本で資金を集め、10年以上をかけて再生する。40代を賭けたこの仕事を、田達はいかんなく『絶対現場感』を發揮した。『絶対音感』があるのなら、『絶対現場感』もあるはずだ。彼は初めて行く『現場』でそれを感じる稀有なる本能を持っている。礼拝堂でも、ここでいつか自分が描く姿が脳裡に浮かんだという。

50代を過ぎることになる琴平で

ころに、『表現』を探したんです」。

彼は素材としての「家」、そして「誰にも所有できない場」＝パブリックな場への関与」に活路を見出すことになったのである。



白書院で制作中の田窪。メバール釣り用の竿にペットボトルの口をついた手製のスティックで描く。遠くからオイルパステルで描くための工夫は、マディスのロザリオ礼拝堂での制作を思わせる このページPhoto Kenji Morita

たくぼ・きょうじ

1949年愛媛県生まれ。金刀比羅宮文化顧問。72年、多摩美術大学絵画科油画専攻卒業。真木廊(東京)、フジタレビ、ギャラリー(東京)などで個展。71年国際青年ビエンナーレ、74年東京国際ビエンナーレ、75年第9回パリ・ビエンナーレ、84年ヴェネツィア・ビエンナーレなどに参加。87年、建築家の鈴木ア二、写真家の安齋重男とともに「絶対現場」を開催。89年に渡仏し、99年までサン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂再生プロジェクトに携わる。これによりフランス政府から「芸術・文化勲章オフィシエ」を受ける。01年、個展「TAKUBO 1974-2001 田窪恭治—オブジェから風景へ」(愛媛県美術館)。01年より「琴平山再生計畫」を開催し、04年に社殿「緑黛殿」「神札授与所+十社務所」を建設。建築家鈴木ア二が村野藤吾賞・日本芸術院賞を受賞。08年にはフランス国立ギメ東洋美術館で「こんびらさん—海の聖域」展を実現した。著書に「林檎の礼拝堂」「表現の現場—マチス、北斎、そしてタクボ」ほか。



1月11日、金刀比羅宮の「白書院」で、「御稽古始式」が催され、田窪の襖絵を背景に、黒紋付と袴

も、どのようにこの山が再生していくか——建物や絵画を含め、イメージが立ち上がった。彼はそのインスピレーションの導きによつて、若冲や応挙の障壁画を国内外へと巡回させ、書院の襖絵を描いている。「画家」と呼ばれると、彼は苦笑するだろうが、現場に足を踏み入れた瞬間に感じ、言葉にならない感覚!「絶対現場」のプログラムは、他者との共同作業が中心ながら、最後には自身が「何か描く」ことで完成するのだ。

1月11日、金刀比羅宮の「白書院」で、「御稽古始式」が催され、田窪の襖絵を背景に、黒紋付と袴で盛装した巫女が舞を奉納した。行事に参列する姿を目の当たりにして、まさに田窪が「神域」に生きる表現者であることを実感した。金刀比羅宮での制作と生活のすべては、神事と隣り合わせにある。琴平に滞在した画家のなかで、年月では田窪がすでに最長となる。不思議なほどに、本人も制作も神事に溶け込んでいる。前世紀末に得た「絶対現場」感覚を達成すべく、彼は今少しこでの生活を続けることになるようだ。

●はやし・ようこ「美術評論・美術史研究」
1月10・11日、香川・琴平町の金刀比羅宮「白書院」ほかでインタビュー